

学力向上	豊かな 人間性の育成	健やかな 身体の育成
不登校児童 生徒支援	インクルーシブ 教育	食育の推進
学校・家庭・ 地域連携	その他	

事業名

校内サポートルーム（校内別室）整備推進事業

事業の経過・背景・課題

全国的に不登校児童生徒が増加する中、本市では、「京都市教育相談総合センター」での教育相談体制の充実はもとより、2校（洛風中学校・洛友中学校）の「学びの多様化学校（不登校特例校）」や教育支援センター「ふれあいの杜」5か所の設置、フリースクールとの連携等、子どもたちの実態を踏まえた居場所づくりの取組を先進的に進めてきた。

こうした中、令和5年3月に文部科学省が策定した「COCOLOプラン」が示されたことも踏まえ、本市においても、登校を望んでいる児童生徒が新たな不登校にならないよう、校内に児童生徒が安心して過ごすことができる「校内サポートルーム」の整備が喫緊の課題となっている。

取組内容

交付実績額： 6,000 千円

○パーテーションやカーペット等の設置による、児童生徒が安心できる居場所と個別の学習空間づくり

- ・A校では、簡易パーテーションを使用し、会議室を校内サポートルームとして整備
- ・室内を仕切ることで、人目を気にせず、児童が安心して過ごせる場所になりつつある。

教室、家の選択肢だけでなく、別室という選択肢で救われる児童は多いと、A校はその効果を実感している。



※みんなの顔が見える配置、壁に向かう配置と空間づくりを工夫

○校内サポートルームの環境づくり、児童生徒の見守りや学習支援等を担当する子ども支援コーディネーターの配置

- ・B校では、校内サポートルーム内に対応教員名を掲示したり、教員一人一人がホワイトボードに絵を描くなど、教員全体で見守る温かい空間づくりを行っている。整備後、教育支援センター（ふれあいの杜）通級者や不登校だった生徒が別室登校を開始している。

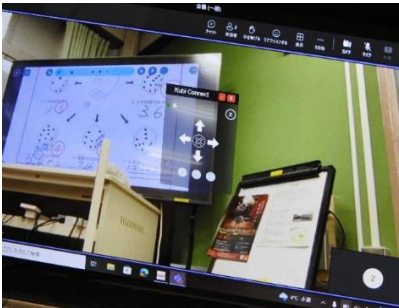


- ・B校で、校内サポートルームを利用する生徒の登校状況についてサンプル調査を行ったところ、概ね肯定的な変化が確認できた。（開設日：令和5年12月11日）

期間 利用者		開設前1か月 (11/1～12/14の期間)				開設後1か月 (12/15～1/31の期間)				開設後2か月 (2/1～2/29の期間)			
利用 人数	利用 開始日	要登校 日数	登校 日数	うち別室 利用日数	登校率	要登校 日数	登校 日数	うち別室 利用日数	登校率	要登校 日数	登校 日数	うち別室 利用日数	登校率
1人目	12/12	30	10	1	33.3%	24	14	6	58.3%	19	10	7	52.6%
2人目	12/12	30	13	13	43.3%	24	16	16	66.7%	19	17	17	89.5%
3人目	12/20	30	6	0	20.0%	24	4	2	16.7%	19	8	7	42.1%

子どもの声：友達と会う場所になっている。色々な先生との関わりが持ててうれしい。
 保護者の声：家を出て登校するきっかけになっている。家で学校（校内サポートルーム）の様子をよく話すようになり笑顔が増えた。

- 校内サポートルームから在籍クラスの授業に参加する児童生徒への通信ツールの配備
- ・C校では、校内サポートルームから在籍クラスの授業をオンラインで受講する生徒の学習環境を向上させるため通信ツール「kubi」を利用している。



- ・通信ツール「kubi」について、利用生徒1名及び教職員10名へのアンケート調査を行ったところ、生徒からは、「授業が理解しやすい」、「プリントを全部埋められるようになって、黒板の见たいところがいいつでも见れるようになった。」といった意見や、教員からは「自由に見たい場所が見れるので、自分のペースに合わせて学習できる。」等どちらも概ね肯定的な回答が得られた。

事業の成果・今後の展望等

サンプル調査の結果から、校内サポートルームを利用する生徒の登校状況に概ね肯定的な変化が確認できた。不登校の児童生徒が登校を始めるきっかけとして大きな成果があったと考える。個々には学習の遅れやそれに基づく不安から登校が継続しにくい状況もあるため、自分のペースで学習・生活できる校内の居場所づくりを進めるとともに、子ども支援コーディネーターによる小中接続を意識した支援など中1ギャップの解消に取り組む。

問い合わせ先

京都市教育委員会指導部生徒指導課（075-213-5622）

学力向上	豊かな 人間性の育成	健やかな 身体の育成
不登校 児童生徒支援	インクルーシブ 教育	食育の推進
学校・家庭・ 地域連携	その他	

事業名

支援の必要な児童生徒のための「支援機器・グッズ」を
活用した支援推進事業

事業の経過・背景・課題

「通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（文科省、令和４年１２月発表）での結果が示すように、京都市においても、知的発達に遅れはないものの支援を必要とする児童生徒は年々増加しており、通常の学級や学校生活における支援が求められている。

読み書きの障害や集中すること、聴覚過敏等の様々な困難を支援・補完するための各種の「支援機器・グッズ」について、京都市では、平成３０年度から学校園への貸出を開始し、通常学級での合理的配慮や代替手段としての活用へとつながられるよう、その普及啓発に取り組んでいる。

各機器の機能は進歩しており、子どもたちにとってより最適な支援方法を研究・試行するとともに、「支援機器・グッズ」を活用した支援の普及・啓発をすすめることで、児童生徒の困りの軽減を図り、学校における合理的配慮の促進を目指す。

取組内容

交付実績額： 3,000 千円

○「支援機器・グッズ」４種類をLD等通級指導教室１１２校（小学校８１校中学校３１校）へ配備し、LD等通級指導教室の担当教員等を中心に貸出を実施

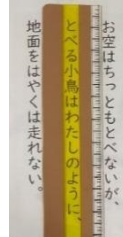
支援機器等名称・性能	対 象	主な効果
①座位保持クッション （椅子に装着し、無理なく正しい姿勢を保持）	授業中正しい姿勢を保つことが苦手な児童生徒	・姿勢が安定し集中できる時間が増えた。 ・授業中の離席が減った。 ・落ち着いて座って学習に取り組むことができた。
②自助具(文具)セット(※) （様々な読み書きの困難を支援する文具類）	読み書きや細かい作業が苦手な児童生徒	ガイドライン付定規：文字が動いて見えるのが軽減され読みやすくなった。 ザラザラ下じき：鉛筆の操作がしやすくなり、枠内に文字が書けるようになった。 コンパス：中心がずれることなく、軽い力で円が描けた。
③デジタル耳栓 （環境音だけを９割近くカットし、声は聞くことができる）	聴覚過敏や周囲の雑音が気になり授業に集中することが難しい児童生徒	・一般的な耳栓よりも、騒音によるストレスは大幅に軽減された。 ・環境音が低減され、先生の声は聞こえやすくなり授業に集中できた。 ・教室がうるさく感じ入りづらさがあったが、教室に入ることができた。
④センサーツール （椅子の脚に装着し、足裏に感覚刺激を与えることで集中しやすくなる）	集中しづらい、多動がみられる、姿勢が乱れる児童生徒	・姿勢が良くなり、集中して授業に向かうことができた。 ・足を上げる、鉛筆を噛む、頭を叩くといった行動が減った。

※ガイドライン付定規、ザラザラ下じき、コンパス、パールペ、白黒定規等９種

①



②



③

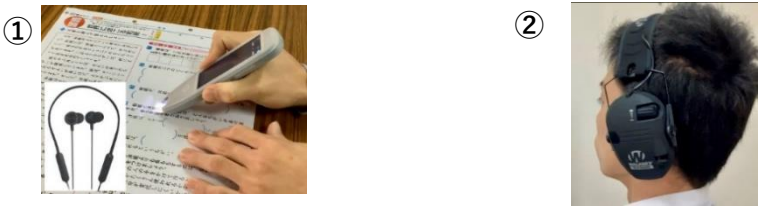


④



○最新の「支援機器・グッズ」2種類を指導部 総合育成支援課に導入し、試行・研究のうえ、学校への貸出を実施

支援機器等名称・性能	対 象	主な効果
①ペン型スキャナー (読み上げてほしい箇所を なぞるだけで音声読み上 げをしてくれる)	読むことが苦手だが音 声であれば理解しやす い児童生徒	・無線対応のワイヤレスイヤホンと併用することで、読み上 げ音声に集中できた。
②電子式イーマフ (必要に応じてボリュームを 調整し、聞きたい音を適 切な音量で聞くことがで きる)	聴覚過敏や周囲の雑 音が気になり授業に集 中することが難しい児 童生徒 デジタル耳栓のイヤホン を装着する感覚が苦手 な児童生徒	・騒音の音量全体を低減することができ、テストや自習 に集中して取り組むことができた。



事業の成果・今後の展望等

- 「支援機器・グッズ」をより多くの児童生徒が使用できる環境が整うとともに、学校現場の教員にとって、「支援機器・グッズ」がより身近な存在になり、通級指導教室担当者以外の教員にも普及・啓発が進み、学校における合理的配慮の認識が高まった。
- LD等通級指導教室設置校での貸出が多い状況であったことから、今後、周辺校においても貸出が活性化するよう、「支援機器・グッズ」の効果を更に周知していくとともに、一人ひとりの困りに最適な支援を行えるよう、最新機器の研究を進める。

問い合わせ先

京都市教育委員会指導部総合育成支援課（075-352-2285）